

ヤンデレな黒狼の
当主様に拾われて
甘く溺愛されてます
～犬化おちんぽで
どぷどぷ♡抜かすの
中出しで番に
されちゃいました～
なぎさ

なぎさの妄想部屋

文庫版 / 体験版

第一章　ここまで迷ったのにな？

気づいたときには、走っていた。

枝が頬を掠めて、旅装の裾がどこかで破れる音がした。息が痛い。心臓がばくばくいつている。それでも、足は止まらなかった。姉さんなら、こんなことは絶対にしない。

わかってる。婚礼の列を抜け出す花嫁なんて、物語にだって出てこない。……ううん、出てくるとしたら、きっと悪役のほうだ。

ある日、父の書齋に呼ばれた。

「おまえには、もったいない話だ」

差し出された釣書には、隣町でいちばん羽振りがいいという商家の、当主の名前があった。私より二十も年上で、あまりよくな

い噂ばかりの人。使用人を怪我するまで働かせるとか、先の奥さんがどうしていなくなったのか、誰も知らないとか。

同じ日、姉さんには伯爵家から縁談が来た。家中がお祝いに沸いて、母さんは泣いて喜んで、私の釣書はその横で、嫁入り道具の目録と一緒に文机に置かれていた。

「月菜は昔から、しょうがない子だから。これくらいの家で、ちようどいいのよ」

姉さんは、よくそう言った。そう言われても仕方ない。私は刺繍をすれば指を刺すし、お茶を運べば零すし、姉さんが一度で覚えることを、三度教わってもまだ間違える。頑張らないと。迷惑をかけないようにしないと。そうやって生きてきて、最後に届いた縁談がこれなら——つまりそれが、私の値段ということだ。

だから、嫌ですなんて言えなかった。言える立場だと思ったことも、なかった。

なのに。

興入れの道中、川辺で休憩になったとき。荷を解く人たちの誰ひとり、私を見ていなかった。花嫁衣装の入った長持は大事そうに日陰へ運ばれて、私は、そのへんの石の上に置かれていた。

ああ。荷物の扱いのほうが、丁寧だなあ。

そう思ったら、次の瞬間には、足が勝手に動いていた。

……というのが、ことの顛末だ。

「……………帰ろう」

どれくらい走ったのか。木々の間で立ち止まって、私はようやく我に返った。冷静になってみれば、これは家出ですらない。た

だの迷惑だ。今ごろ道中の皆が真っ青になって探している。下手をしたら、姉さんの縁談にまで障りが出る。二十歳にもなって、子供みたいなことをして。

帰って、謝ろう。それで、ちゃんと嫁ごう。

そう決めて、来た道に戻った。……戻れた、はずだった。

私は昔から、まっすぐ歩いているつもりで斜めに進む。自分の家の中でさえ迷う。そんな人間が、目印もない森で来た道をたどれるはずが、なかったのだ。歩けば歩くほど木は深くなり、川の音は消え、気づけば陽が傾いて、木々の影が長く伸びていた。

がちん、と。

落ち葉の下で何かが跳ねて、右の足首に噛みついた。

「——っ」

声も出なかった。一拍遅れて、燃えるような痛みが来た。見下ろすと、鋼の獣罾が足首を咥えこんでいる。ぬるりと熱いものが靴の中へ伝っていく感触がして、頭の芯が白くなった。

引いても、びくともしない。両手で開こうとしても、指が滑るだけ。痛みで目の前がちかちかする。森はもう薄青く沈みはじめていて、遠くで、獣の声が長く尾を引いた。

死ぬのかな、と思った。

こんなところで、誰にも見つからないまま。……それはそれで皆に迷惑がかかるなあ、と思ったら、笑うより先に涙が出た。最後に考えることまで迷惑のことだなんて、我ながら、しょうがない子にもほどがある。

「——人間が、なぜこんな場所にいる」

声は、前触れなく降ってきた。

顔を上げると、黒い人が立っていた。黒い外套に、短い黒髪。夕闇より少し濃いところから切り抜いてきたみたいな人で、その目だけが、静かにこちらを見下ろしている。怖い、と思うより先に、綺麗な人だなあと思ってしまった。たぶん、痛みで頭が少しおかしくなっていた。

「あ、の……罨、が」

「見ればわかる。動くな」

彼は私の足元に膝をつくと、素手で罨の顎に指をかけた。危ない、それは大人の男の人が道具を使っても——と言いかけた私の目の前で、ぎち、と鈍い音を立てて、鋼がねじれるように開いた。

……開いた？

呆然としている間に、足は自由になっていた。彼は外套の裏地を無造作に裂くと、思いのほか丁寧な手つきで、私の足首を縛っていく。

「で……その足で、どうする気だ」

「な、なんとか、道を探して……」

「ここまで迷ったのに？」

くす、と笑われた。

「う……」

ぐうの音も出ない。しゅんとうつむいた私の上で、彼は静かに続けた。

「頼ればいいだろう。ここに人がいるんだから」

「で、でも……これ以上、ご迷惑は……」

「さすがに、この状態で放ってはおけない。俺も鬼じゃない。それに、そんな足でうろつけば命に関わる」

正論だった。ぐらぐらする頭で考えても、まったくその通りだ。私は膝の上でぎゅっと手を握って、それから、情けなさで泣きそうになりながら口を開いた。

「……すみません、軽率でした。もしよければ……助けて、くださいますか？」

返事が、なかった。

見上げると、彼は固まっていた。切り抜いたような綺麗な顔のまま、ぴたりと、時間ごと止まったみたい。

「ど、どうしました？ やっぱり、ご迷惑ですよね……」

「いや、違う。むしろ……」

「？」

「……なんでもない。大丈夫だ。俺の屋敷に行こう。あそこなら、全部揃ってる」

「全部？——ひゃっ」

言い終わる前に、身体が浮いた。片腕を膝の裏に、もう片腕を背中に回される。いわゆる、その、お姫様抱っこというやつで。

「ちょ、あ、あの、そこまでしていただくわけには」

「森を歩くのは無理だろ。いいから、大人しく捕まってくれ」

「は、はい……」

はい、じゃないでしょう、私。

でも、他にどうしようもなかった。おそろおそろ首に腕を回すと、外套越しにもわかるくらい、彼の身体はびくともしなかった。

人ひとり抱えたまま、獣道を平地みたいに歩いていく。

「……月菜、です。あの、助けてくださって」

「宵だ」

「宵、様」

名乗っただけの短いやりとりなのに、心臓がうるさかった。怪我のせいだ。血が足りないせい。そういうことにして、私は持ち無沙汰に、自分のブラウスの胸元をぎゅっと握った。

「痛むか」

「へ、平気です。……あの、重くないですか」

「軽すぎて心配になるくらいだ」

「そ、それは……すみません……」

「謝ることはない。ただ——もっと食べたほうがいい。帰ったら

用意させよう」

なんだろう、この人。口数は少ないのに、会話が途切れたら途切れたままにしない。私が痛みを忘れられるくらいの間隔で、ぽつ、ぽつ、と声をかけてくる。……優しい人なんだろうか。こんなに、怖いくらい静かな雰囲気なのに。

やがて木々が開けて、私は自分の目を疑った。

夕闇の中に、お屋敷が建っていた。実家だって、それなりに大きい家のはずだ。でも、桁が違う。石造りの壁がずっと向こうまで続いて、窓の明かりが数えきれない。門の前には使用人らしい人たちが並んでいて、彼の姿を認めた瞬間、ざつ、と音がしそうな揃い方で、一斉に頭を垂れた。

誰も、何も聞かない。当主が見知らぬ怪我人の娘を抱えて帰っ

てきたのに、誰ひとり。

（高貴な、身分の方……？）

「こ、ここ……？」

「ああ」

宵様は、なんでもないことのように言った。

「今日からしばらく——お前の家だ」

第二章　したかつたから

目が覚めると、天蓋つきの寢台にいた。

寢台、と呼んでいいのかもわからない。私の部屋が丸ごと入り
そうな広さで、敷布は雲みたいで、足首には真新しい包帯が巻か
れ、薬草のいい匂いがした。昨夜のことが夢じゃなかったと理解
するのに、たつぷり十数える必要があった。

「お目覚めですか、お嬢様」

洗面の支度を持って入ってきたのは、年かさのふくよかな侍女
さんだった。にこにこと人のよさそうな顔。その頭の上で――ま
るい耳が、ぴよこ、と動いた。

……耳。

頭の上に。耳が。

「あ、あの……もしかして、ここって……」

「獣人領でございますよ。……あらまあ。お嬢様、ご存じないいらしたの」

獣人領。人間の国と、あの深い森を挟んで隣り合っている、獣の血を引くひとたちの国。交易の隊商が行き来しているのは知っているけれど、人間がふらりと踏み込んでいいような場所では、絶対に、ない。

顔から血の気が引いていくのがわかった。

朝の見舞いに来た宵様に、私は寝台の上で縮こまりながら白状した。

「そ、そんなところに、私、勝手に……」

「ああ、だから驚いたんだ。いくら迷っても、普通はここまで来ない」

「あ……すみませ……」

「いや、いいんだ。そんなところも……かわいい」

「かわいい？」

どこに、そんな要素が。今の話のどこかに、かわいいところがあっただろうか。混乱する私を見て、彼は目元だけで笑った。

「て、ことは……宵様も、獣人……？」

「ああ、そうだ」

言われても、まだ信じられなかった。耳もない。尾もない。どこからどう見ても、人間の——ものすごく綺麗な、人間の男の人だ。

「日頃は、人間の姿で暮らしてる。変わるのは——特別なときだけだ」

その言い方が少しだけ引かかったけれど、特別なとき、が何なのかは、聞けなかった。



それから、足が治るまで置いてもらえることになった。

大事にされた。……大事に、されすぎた。部屋の花は毎日替わるし、食事は毎食、実家の祝い膳より豪華だし、湯浴みには侍女さんが三人もついてくれる。落ち着かなくて、せめて何かお手伝いをと申し出て——初日に花瓶を倒し、二日目に足を引きずった

まま廊下で迷って使用人の皆さんに搜索され、三日目には、お礼を言おうとして執務室ではなく物置の扉を開けた。

「も、申し訳ありません……私、昔から、その……しょうがない子、なので……」

「だからなんだ？」

「え？」

「しょうがなくなたっていい。しょうがなければ、頼ればいい——俺に」

「そんな、頼るなんて……」

「俺がそうしてほしいのにな」

そう言って笑う宵様になんと答えていいか、わからなかった。



宵様は、毎日来た。

朝は食事が終わるころに顔を出して、昼は中庭の見える廊下で行き合って、夕方には必ず、足の様子を見に来る。この国の当主さまが、と恐縮する私に、彼は「仕事は回る仕組みにしてある」と、よくわからない答えを返した。

その日も、彼は寝台の脇に腰かけて、他愛のない話を聞いてくれていた。

「月菜」

名前を呼ばれて顔を上げた、その距離が、おかしかった。

（え？ これって……）

美しい顔が、近づいてきて——唇が、合わさった。

柔らかい感触が触れて、ぴり、と甘いものが唇から走った。

「あ……い、いまの……」

「キスっていうんだ、知ってたか？」

「し、知ってます、けど……！　な、なんで……？」

「したかったから。……月菜と」

（も、もしや……獣人の、挨拶なのかしら……？）

変な勘違いや期待をしては駄目だ。お世話になっている身なのだから、ここの文化には、合わせないと。

「そ……そう、ですか……」

自分にそう言い聞かせても、顔が熱くなるのは止められなかった。

「かわいい。……もう一回」

「え？ ……んう♡ ふ、う……♡」

今度はもつと長く、何度も啄まれる。

「ひ、ん……♡」

ようやく離れた彼は、熱っぽい目で、私を見ていた。

（な、なんで……そんな顔……）

そして、彼は世間話の続きみたいに、こう言うのだ。

「足、見せて？」

「は、い……」

包帯を解かれて、傷口が晒される。まだ塞がりきっていないくて、

我ながら痛々しい。

「痛むか」

「は、はい……少しだけ」

「だよな。……じゃあ、早く治るようにしないと」

彼の口から、赤い舌が覗いた。あろうことか、傷口を、ねろお♡と舐め上げられる。

「ひゃう！　そ、そんなところ……！」

「痛かったか？」

「い、いいえ……」

不思議と、痛くなかった。

「なら良かった。俺の唾液には、治癒の力がある。こうすると治りが早いから——毎日こうしたほうがいい」

「そ、うなんですか……で、でも！　そんなところ、舐めていた^だくわけには……！」

「なんでだ」

「だ、だって……汚い、です……」

「汚い？ ……月菜の、ここが？」

ちゅぷ♡と、また舐められる。

「ひん♡」

なぜか、舐められたところから、じわじわと何かがせり上がってくる。

「こんなに、おいしいのに。……ちゅ、れろお♡」

「っっ、や、それ、へん、です……っ」

何度も舌を這わされるたび、ぴくぴくと反応してしまう。

「かわいい……」

「や、やめてくださ……っ、それ、言うの……！」

「俺は本心しか言っていない」

「そ、そういうのが、困るんです……って……！」

「なあ、月菜」

「な、なん、ですか……」

「もう、敬語やめてくれ」

「そんな！ た、立場が違いますし……お世話になってるのに……」

「俺が、そうしてもらいたいんだが」

足首に口づけたまま、上目遣いで言われて、胸の奥がきゆうん♡と鳴ってしまった。こんなときだけ大型犬みたいだなんて、この国でいちばん偉い人に、ものすごく失礼かもしれないけれど。

「わ、わかりました……」

「そうじゃないよな？」

「わかつ、た……。……宵」

「ん。いい子だ」

ちゅ、と、また傷の上にキスが落ちてくる。

「はう♡」

くつくつと、彼は機嫌よさそうに笑っていた。

（この人は……。私を、どうしたいの……。？）



翌日、お茶を運んでくれた侍女さんの前で、うつかり、ふたりのときの調子で「宵が」と言ってしまった。かちゃん、と茶

器が鳴った。

「……あ、あの？」

「い、いえ。なんでも、ございませんとも」

なんでもなくは、なさそうだった。あとで気づいたことだけど——この屋敷で、当主を名前だけで呼ぶ人は、ひとりもない。敬語をやめることを許された人も、私が知る限り、ひとりも。

期待したくないのに、胸の奥で、何かがくすぶってしまふ。それでも——何でも持っているこの人が、私なんかを選ぶだなんて、やっぱり、信じられなかった。

第三章　ほんとは、また今度な

その夜は、暖炉の前の長椅子で、彼が持ってきてくれた菓子をつまみながら、他愛のない話をしていた。……はずだった。

「月菜」

名前を呼ばれた、次の瞬間、視界が回った。背中に、長椅子の柔らかさ。頭の両脇に、彼の腕。

「あ……こ、こんなこと……」

「なにか、問題あるか」

「だ、だって、私……こ、婚約者が……」

「顔も見たことのない、好きでもない男に？」

「え……？　なんで、それを……」

「月菜のことは、なんだってわかる」

すつと大きな手が脇腹を撫でて、ぴく、と身体が跳ねた。

「なあ、月菜。……俺が、好きか？」

「え……」

好き。言いたかった。言葉は、喉のすぐそこまで来ていた。

——でも、怖かった。そんなことを言って、もし、笑われたら。

『月菜ちゃんてさ。……お姉さんと、仲いい？』

ふいに、昔のことがよみがえった。学生のころ、よく話すようになった男の子がいた。私の話を、こんなに聞いてくれる人がいるんだって、嬉しかった。その彼が、ある日、照れながらそう言った。彼が見ていたのは最初から、私の後ろにいる姉さんで。私は、姉さんへ渡るための、口実だった。

「――何を、考えてる？」

冷えた声がした。

「あ……ご、ごめんなさ……」

「月菜」

顎を、長い指に掴まれた。逸らしような近さで、目を合わせられる。

「俺といるときは、俺のことだけを考えないとな？」

寝けるような、低い声だった。怖い。怖いのに、身体の芯が、なぜか熱くなった。

「わかった……。ごめん、なさい……」

「ん、よろしい」

ふ、と目元が緩んで、声から冷たさが消える。

「月菜。さっきの返事は、急がなくていい。ゆっくり、好きになれればいい。……だから」

腕を引かれて、気づけば、すっぽりと抱き込まれていた。大きくて、固くて、しなやかな身体。……それから、脚に当たる、熱い存在感。

「——もっと、俺を知ってくれ」

「し、知るって……」

「大丈夫だ。全部、教えてやる」

キスから、始まった。

「ふ、う……♡ んん……♡」

手を握られて、指を絡められて。深く合わさるたび、頭の芯が、とろりと煮えていく。

（頭……ぼーっとする……♡ なんにも、考えられなく、なる……♡）

寝間着が緩められて、素肌に大きな手が滑り込む。胸のふくらみをやわく包まれて、手のひらの熱さに、膝が、勝手に寄った。先を指の腹で転がされて、腰の奥が疼く。指は急がない。くにくに♡と同じところを転がして、ときどき、きゅっと摘まむ。摘まれるたびに、声が、んん♡と鼻にかかった。

（宵の手……大きい。私の胸、片手で全部包まれちゃう……）

「あ……っ♡ん、や……♡」

「かわいい」

もう片方の先も、唇に含まれた。ちゅ……♡と吸われて、舌でころころ♡と転がされて、指と舌で、両方いっぺんに。息が、浅

くなる。

脚の間に指が伸びて、くち♡と濡れた音が鳴る。

「や……っ、お、音が……っ」

「こんなに濡らして、かわいい。……もつと聞かせて？」

長い指の腹が、皮の上から、一番敏感なところを撫でる。ぬる……♡ぬる……♡と、ゆっくり。痛いくらい敏感な場所なのに、ぬめりのおかげで、ただ気持ちいいだけになってしまう。同じところを、何度も。腰が、勝手に浮いた。閉じようとした膝は、彼の脚に割られて、開かれたまま戻らない。

「あっ♡ や、だ……そこ、ばっかり……っ♡」

「ここが好きなのか、月菜は」

指が、下へ滑る。浅いところを、指先でくちゅくちゅ♡とほぐ

されて、入口をなぞられるたびに、中がきゅんと疼いた。まだ入っていないのに、疼く。それから、さっきの場所へ戻って、今度は、くりくり♡と円を描く。声が止まらなくなる。かわいい、かわいい、と、そのたびに落ちてくる言葉が、身体より先に、心を溶かしていく。誰にも言われたことのなかった言葉を、この人は、惜しげもなく、私だけにくれる。

（宵の、指で……♡ 皮の上から、くりくりって……♡ だめなのに、気持ちいいの、止まんない……♡）

お腹に力が入って、何か知らない感覚が昇ってくる。その瞬間に、指の動きが速くなる。腰が、自分から揺れる。

「あっ♡ や、それ、だめ……っ♡ なにか、きちやう、から……っ♡」

「イけぱいい。……ほら」

指の腹で、ぐに♡と押し潰された。

ぱん、と目の裏で弾けて、腰が跳ねた。足が、ぴんと伸びる。背中が浮いて、長椅子に落ちて、そのあとも、ぴくっ、ぴくっ、と勝手に震えが来た。息が、整わない。

(……今の、が……いく……?♡)

震えの止まらない私の額に口づけて、彼は自分の服を脱ぎ捨てた。

「月菜、挿れるぞ」

「ひゃ……♡」

頭の奥で、最後の警鐘が鳴った。婚約者。家。帰らなきやいけない身。——でも。

見上げた先の、宵のうつとりした顔を。私だけを映す目を、見
てしまったら、もう駄目だった。こんな目、見たことがない。他
の誰も、私をこんなふうに見てくれた人は、いなかった。

「……いいか？」

ここまでしておいて、最後だけこんなふうに聞いてくるなんて、
ずるい。

私は涙に濡れた視界で、でも、確かに頷いた。

「月菜……かわいい。……愛してる」

「——っ♡」

ずっと欲しかった言葉を注がれて、心のほうが、先に落ちた。

体験版は、ここまでです。

この夜は、まだ『ほんとの』ではありません。
そして番の夜。黒い耳と尾を現した彼のそれは、根元に硬い
瘤があって――抜けません。

「かわいい月菜。……まだ、決めかねてるのか？」

「じゃあ――また、教えてやる。俺のこと。……今日は、全
部だ」

「噛まれて、イっちゃったのか？よっぽどこうして虐められ
たいみたいだな」

「……お仕置きは、ここからだ」

全体で約2.5万字。体験版はその3分の1（第一章～第三章の
途中）です。

続きは、第三章の残りから第六章まで月菜視点。そのあとに
姉視点の番外編、第七章と終章は宵視点で締めます。

▼ この続きは、完全版で

DLsiteにて発売中です。サークル「なぎさの妄想部屋」、ま
たは作品番号RJ01720063で検索できます。

https://www.dlsite.com/girls/work/=product_id/RJ01720063.html

お気に入り登録をしておくと、続きを読みたくなった夜にす
ぐ戻ってこられます。